

ほつかいどう NIE 通信

発行 北海道 NIE 推進協議会

〒 060-8711 札幌市中央区大通西 3 丁目 6

〒 060-8711 札幌市中央区大通西 3 丁目 6 北海道新聞社内 ☎ 011-210-5802 FAX 011-210-5826



被災地の復興 発信

岩手で全国大会 震災体験 授業や発表で

東日本大震災で大きな被害を受けた東北3県（岩手・宮城・福島）では震災後初の開催。大会スローガンは「新聞と歩む」復興・未来へ」を受けて、公開授業や実践発表では震災の記事や防災教育に関する内容が多かった。

書の記事を例に取れば、「被災の体験を共有できる素晴らしい教材」と話し、日曜夜に家庭で新聞スクラップをして、学校の月曜朝の読書の時間を切り抜き記事の発表に充てることを提案した。

また日本語は漢字の意味を理解することがまず必要で、語彙(ごい)力を鍛えるには「国語の授業だけでは足りない」として、小学1年生からでも新聞が読めることが望まれるとした。日本では昔、新聞を読むのは白米を食べるのと同じくらい日常的だった時代があり「新聞立国・日本」だ

北海道NIE推進協議会（高辻清敏会長）主催の第4回北海道セミナーが8月17日、北海道新聞本社（札幌市中央区）で開かれた。教育ジャーナリストの渡辺敦司氏（54）が「新学習指導要領とNIE」をテーマに講演。NIE（教育に新9月6日の胆振東部地震被害を受けた皆様に、謹んで

業の学びだけでは、一原子力政策など新しい課題に対応できない」と、新聞記事など複数の情報から判断することの必要性を強調した。

ワーケーションの「ワーレドカフェ」では、参加者がグループごとに分かれて意見交換 \Rightarrow 写真 \Rightarrow NIEを推進する上で、それぞれの考え方や悩みなどを書き出しながら理解を深めた。

(3)面に渡辺敦司氏の発言
要旨)

北海道新聞ホームページ「NIE」(<http://www.hokudai.ac.jp/nie/>)

斎藤孝教授も
講演でエール

日本新聞協会主催の第23回NIE全国大会が7月26、27の両日、盛岡市と岩手県大槌町で開かれ、北海道はじめ全国から教育、新聞関係者ら約1600人が参加した。北海道からはNIE推進協議会の高辻清敏会長ら十数人が現地入りし、2会場で学びを深めた。

NIE題材 自由に討論

聞を）に取り組む利点と課題などを自由に語り合うワーケーションツップも行われた。セミナーには道内の小中



記念講演を行う斎藤孝さん

たと述べ、今は「NIE」に希望を見い出している」と語った。

2日目の27日は、津波で壊滅的な被害を受けた大槌町の小中一貫校・町立大槌学園と、盛岡市のいわて県

民情報交流センターの2会場で、公開授業と実践発表が行われた。大槌学園では、6年生と、中学3年に当たる9年生で公開授業が行われた。6年生は、切り抜き記事を集めめた新聞作りに向けた準備の授業で、記事を通じて古里への思いを共有した。9年生は、被災した古里と今後どう関わっていくかを記事を通じて考えた。

（高辻清敏会長）主催の第4回北海道NIE推進協議会（北海道NIE推進協議会長）主催の第4回北海道セミナーが8月17日、北海道新聞本社（札幌市中央区）で開かれた。教育ジャーナリストの渡辺敦司氏（54）が「新学習指導要領とNIE」をテーマに講演。NIE（教育に新



NIE題材 自由に討論

日高NIE研究会が結成

会長に浦河の盛永アドバイザー

NIEの普及拡大を目指して日高管内の実践教諭たちが「日高NIE研究会」を結成し、8月18日、日高町立門別中学校で設立総会を開いた。道内では札幌、帯広、旭川などで実

践教諭らの組織があるが、日高管内では初めての設立だ。



盛永美樹会長

この日会長に選出された盛永美樹NIEアドバイザー認定を機に「NIE活動の一層の普及により、日高地区の児童生徒の学力向上と生きる力の育成に寄与したい」と呼び掛けて、研究会設立の機運が生まれた。結成メンバーは小中高、特別支

援学校からの14人。総会で盛永会長は「校種も教科もさまざまな先生が参加する研究会は日高にはなかつた。新聞は信頼性が高く教科横断的な教材になる。NIE活動を通して日高地区を担うミドルリーダーを育てたい」とあいさつした。久田利憲・日高教育局次長は「この研究会で新聞の効果的な活用を学び合う機会を得ることは大変有意義だ」と期待を述べた。

北海道NIE推進協議会の高辻清敏会長もかけつけ、激励のあいさつをした。

日経の川原さん メディア論語る

NIE夏期研修会



II写真II。川原さんは新聞業界はリーマンショック直前の2008年に比べ、

全国の発行部数が20%近く落ち込み、「厳しい状況にある」と指摘。その主因にはスマートフォン普及によるネット社会の拡大があり、メディア全体の広告費でもテレビ業界に迫る勢いにあることを数字で裏付けた。

ただ、ネット業界はニュー

ア「変わるメディア論」を演題にメデニアの今を語った。界についても触れた。今後の新聞業界に任せる一方、深い取材が必要な大型企画を、電子版で配信する日経の取り組みも紹介した。

川原さんは、記事出稿までの手間がかかるとした

上で、「地道な努力をする

ことでメディアの信頼を取り戻していくしかない」と述べた。

NIE実践奮闘記



札幌旭丘高等学校教諭

高瀬 敏樹

た。

大会は5回目／「復興」軸に学びと刺激

教育に新聞を活用する取り組みについて話し合う「第23回NIE全国大会盛岡大会」に参加した。私がNIE全国大会に参加したのは仙台、札幌、熊本、青森の各開催地で、今回は7年ぶり5回目だった。大会司会アガンは「新聞と歩む」復興、未来へ」。東日本大震災から7年余りが経過し、「復興」をキーワードとした被災地・岩手県での2日間について報告する。

7月26、27の両日、盛岡市と大槌町で開かれ、全国の教員や新聞関係者約1600人が参加した。私は高校の公開授業と実践報告が行われた盛岡市の会場で、閉会後の「全国NIEアドバイザー会議」まで出席し

た。1日目の全体会では、明治大学文学部の斎藤孝教授の記念講演が行われた。多くの学校で導入された朝読書は、大学生の1日の読書時間「0」が53・1%と半数を超えたことを根拠

した。最後に参加者全員で簡単なワークショップを実施し締めくくつた。続く座談会では、小中学生のころに震災を経験した岩手県内の高校生と大学生が意見交換した。「語り部になりたい」と震災の経験や教訓の語り

をして考えよう」というテーマの公開授業を見学を実施し締めくくつた。K-P法(紙芝居を使つたプレゼンテーション)などを取り入れて地域などを取り入れて、地域で災害が起つた際の対応策を話し合い提案する授業だった。最初はとても小さな声で話しあった生

に、読書習慣を身に付けて読書には至っていないことを指摘。その原因は自分が好きな本を読ませることで止まっているためだとし、名作の音読とともに、月曜日の朝読書の時間に児童生徒が切り抜いてきた。

この全体会の休憩時間には、盛岡の高校生が取材執筆、製作した速報新聞「イーハトーヴN-EWS」が参加者に配布され、この会議は「新学習指導要領と新聞活用」をテーマに2時間ほど話し合つた。全国から44人の参加があったが、北海道からの参加者は私一人だった。最初に3人のアドバイザーカーの報告があり、その後内高校の「災害を自分事

として考えよう」というテーマの公開授業を見学を実施し締めくくつた。K-P法(紙芝居を使つたプレゼンテーション)などを取り入れて地域などを取り入れて、地域で災害が起つた際の対応策を話し合い提案する授業だった。最初はとても小さな声で話しあった生

が、多くの刺激と学びがあふれた2日間だった。望月善次大会実行委員長は、高村光太郎の詩「岩手の人」から引用して「岩手の人沈深牛の如し」と紹介していた通り、粘り強いNIE活動の上に成り立つ公開授業や実践発表が多かつたのが印象に残つた。

会場に用意されたNIE関連資料はとても豊富で、ワントップで全国各紙の実践資料やワークシートを入手する絶好の機会であった。宅配便で送ることになった段ボール1箱分の資料を、カリキュラム・マネジメントや担当している「情報」を授業に生かしていくことが課題だが、新たな可能性に満ちた楽しい取り組みにな

その日の新聞を配布して行う星社長の講演（北海道高等学校商業教育研究集会で）



どの業界、どの企業にも共通とは思うが、キャリア教育の一環で中高、大学生が職場見学や実習にやって来る。釧路新聞社も同様だが、新聞社を見学先に選んだ子供たちでも、家で新聞を取つてない、新聞はほとんど読んだことがないといふ子は少なくない。本社では少しでも新聞に興味を持つてもらおうと、外に出ることに積極的な星社長自ら、トップセールスで、新聞の読み方、新聞の役割などを地域社会に発信している。

リレーエッセー 多 紙 彩々

地域ニュースこそ宝

釧路新聞編集製作局次長 坂上めぐみ

と記事が紹介され、当の新聞社としても驚く数だけた。商業高校として、地域特産品を活用した加工品づくりに熱心な農業、水産高校などと連携し、販売を商業高校が担当するなどネットワークづくりも提言した。

星社長は4月には高校のキャリア教育の一環として、2年生を対象に「新聞から釧路を知ろう」をテーマに講話した。新聞を活用して地域を知る大切さ、進学や就職にもそうした知識が役立つことを伝えている。「地域で起こうていることは全国、世界の共通課題であり、地域ニーズ

トップが発信 新聞活用法

間に割いたのはこの1年間に本紙に載った釧路商業高校に関する記事紹介だつた。「地元ホテル担当者を招き外国人客へのサービスを学ぶ」「イオンで販売実習」「地元加工品の通信販売を取り組む」：10件ほど次々

基本的な新聞の読み方、地域振興に果たす新聞の役割を紹介したほか、一番時間が割いたのはこの1年間に本紙に載った釧路商業高校に関する記事紹介だつた。「地元ホテル担当者を招き外国人客へのサービスを学ぶ」「イオンで販売実習」「地元加工品の通信販売を取り組む」：10件ほど次々

が、最近は若い先生方も新聞離れが進んでいるといわれている。そこでは、先方に対する新聞の存在、新聞の活用の仕方に興味を持つてもらおうというわけだ。

星社長によると、事業部、社長室長時代から「講師に呼んでもらえれば新聞について話します」とP.R.を地域社会に発信していく。

9月6日未明発生した胆振東部地震で、北海道NIE推進協議会は同日、日高管内新ひだか町で開催する星社長による講演会として、午後からお呼びが掛かるようになっていたとのこと。その際、その日の新聞を配る、当の団体や学校に関する記事を取り上げる：を必ず行っている。手応えは上々で、子供たちも含めて真剣に新聞に目を通してくれる

そうだ。「いくらSNS（インターネット交流サイト）が発達しても新聞の公共性への信頼度は高い」との思いを強くしている。

新聞に親しんでもらう機会としては、新聞週間に合わせて、釧路地区新聞販売店主会が、釧路地域の高校10校全クラスに本紙や全国紙など合わせて6紙を配布。休み時間に自由に読んでもらう機会を作っている。近年、選挙権年齢が18歳以上へと引き下げられたタイミングもあって、高校3年生の教室では選挙に関する報道が話題になるなど、情報源としての新聞の存在をアピールしている。

こうした活動を後押しし、次の段階として、この高校全クラスに新聞がある期間中に、実績のある社長なり、記者なりが出向いて高校生に新聞について講話を持つことを期待している。

編集後記

○…震源地は震度7、全道の死者40人超の胆振東部地震。9月6日未明、北海道を襲った震災は私自身にとって改めてメディアを考える機会になった。「大災害の時こそ新聞の真価が問われる」という語り継がれる言い伝えを思い出した。

○…どのメディアが災害に強いか。直後の「自宅待機」生活からは、まずテレビが脱落。全道停電が続くと、ただの箱と化した。最新情報を求めるスマート・携帯では全体像が分からぬうえ、電池消耗に悩まされた。大健闘したのはラジオ。

ハンドルで手動発電すれば延々と放送を繰り返した。

○…肝心の新聞はどうか。朝夕の発行なのに各紙は膨大な情報量で他メディアを圧倒した。一刻でも正確な情報をとの思いから被災地の肉声や小売店の窮状、電力会社への批判、交通や断水、避難所の情報などを逐一報道した。地震翌日、地元紙では東京の大学生の見学会が組まれていた。製作現場を見た学生の1人は「忘れられない研修になりました」。緊張した新聞作りはデジタル世代にどう響いたか。興味深い。（森）

胆振セミナー 地震で中止

カル新聞としてのモットーだ。

星社長によると、事業部、社長室長時代から「講師に呼んでもらえれば新聞について話します」とP.R.

予定だった胆振東部地震で、北海道NIE推進協議会は同日、日高管内新ひだか町で開催する星社長による講演会として、午後からお呼びが掛かるようになっていたとのこと。その際、その日の新聞を配る、当の団体や学校に関する記事を取り上げる：を必ず行っている。手応えは上々で、子供たちも含めて真剣に新聞に目を通してくれる

そうだ。「いくらSNS（インターネット交流サイト）が発達しても新聞の公共性への信頼度は高い」との思いを強くしている。

新聞に親しんでもらう機会としては、新聞週間に合わせて、釧路地区新聞販売店主会が、釧路地域の高校10校全クラスに本紙や全国紙など合わせて6紙を配布。休み時間に自由に読んでもらう機会を作っている。近年、選挙権年齢が18歳以上へと引き下げられたタイミングもあって、高校3年生の教室では選挙に関する報道が話題になるなど、情報源としての新聞の存在をアピールしている。

こうした活動を後押しし、次の段階として、この高校全クラスに新聞がある期間中に、実績のある社長なり、記者なりが出向いて高校生に新聞について講話を持つことを期待している。

9月6日未明発生した胆振東部地震で、北海道NIE推進協議会は同日、日高管内新ひだか町で開催する星社長による講演会として、午後からお呼びが掛かるようになっていたとのこと。その際、その日の新聞を配る、当の団体や学校に関する記事を取り上げる：を必ず行っている。手応えは上々で、子供たちも含めて真剣に新聞に目を通してくれる

そうだ。「いくらSNS（インターネット交流サイト）が発達しても新聞の公共性への信頼度は高い」との思いを強くしている。

新聞に親しんでもらう機会としては、新聞週間に合わせて、釧路地区新聞販売店主会が、釧路地域の高校10校全クラスに本紙や全国紙など合わせて6紙を配布。休み時間に自由に読んでもらう機会を作っている。近年、選挙権年齢が18歳以上へと引き下げられたタイミングもあって、高校3年生の教室では選挙に関する報道が話題になるなど、情報源としての新聞の存在をアピールしている。

こうした活動を後押しし、次の段階として、この高校全クラスに新聞がある期間中に、実績のある社長なり、記者なりが出向いて高校生に新聞について講話を持つことを期待している。

（森）